大学日语专业高年级教材

日语

（第八册）

陈生保
胡国伟 编
陈华浩

上海外语教育出版社

大学日语专业高年级教材
日　语
第八册
上海外国语大学日语系
陈生保　胡国伟　陈华浩　编

上海外语教育出版社出版
（上海外国语大学内）
江苏宜兴市印刷二厂印装
新华书店上海发行所发行

开本 787×1092　1/16　8.25 印张　164 千字
1997 年 12 月第 1 版　1998 年 10 月第 8 次印刷
印数：2 000 册
ISBN7－81009－266－9
H·160　定价：6.00 元
本版图书如有印装质量问题，可向承印（订）厂调换。

前言

随着中日关系日益密切，两国各方面的交流日趋频繁，我国学习日语的人数与日俱增。新中国成立以后，特别是近几年来，虽然已经出版了几种供日语专业低年级使用的教材，然而，高年级的教材却至今不见闻世。为了满足社会的需要，我们对在我系已使用过六、七轮的教材作了认真修改，现付印出版。

本教材是大学日语专业的高年级精读课教材，是我系所编日语基础课教材《日语》(一～四册，上海译文出版社出版)的续篇。全套教材共有四册(五～八册)，每学期学习一册，供三、四年级使用；同时也可供已具有日语基础的广大自学者作为进一步提高日语水平的教科书。

本教材的编写原则如下：

(一) 注意思想性。所选课文和编写的例句、练习，都注意能对学生有一定的启迪和教育作用。当然，这里所说的教育作用，是就广义而言的。它既包括热爱科学、献身祖国、诚实为人、珍惜友谊，也包括热爱自然、爱护动物、礼貌待人、尊敬师长等等。

(二) 注意实用性。我们主要选择反映今日日本的现代题材，尽量做到介绍客观，实事求是；在语言方面，则采用现代的规范语言，不仅要求正确、流畅，而且尽量做到生动、优美，以便使学生能学到地道的日语。

(三) 注意实践性。本教材注重培养学生的外语实践能力，希望学生的听、说、写、读、译五种能力全面提高。为此，我们在每课课文之后，都配备了形式多样，内容丰富的练习。

(四) 注意文章的趣味性和题材、体裁的多样性。本教材所选文章，内容上尽量做到活泼生动，饶有趣味；题材方面则有中日友好、日本的社会风貌、伦理道德、文化特色、语言文学、人物历史、自然风光等等；体裁方面，除了一般的记叙文之外，还有评论、随笔、抒情散文、游记、小说、诗歌、传记、讲演、剧本、回忆录、科普文章等等。在第七、第八册中，我们还选了一

些有关论述日本颇具代表性的几部古典作品的文章，並让学生阅读和欣赏这些作品的部分章节。

（五）注意既符合大学日语专业的要求，也照顾社会广大自学者的需要。为此，我们在生词和注释等方面力求详尽；所有难读汉字的字旁都注了读音。

（六）叙述文字全部使用日语，目的是为了培养学生用日语思维的能力。个别较难的地方附了汉语，以供参考。

我们希望使用本教材的教师采用「精讲多练」的教学法。本教材比之低年级基础课教材，不仅课文长度增加，而且语言难度和内容深度也有较大的提高，而上课时间则有所减少。为此，我们建议教师在学生充分预习的基础上，进行重点讲解，减少讲课时间，增加课堂练习时间。在练习的形式方面，可以采用问答、讨论、座谈、讲演等多种方式，並注意把口头和笔头、课内和课外有机地结合起来，使学生不仅彻底理解，而且能够熟练地掌握和应用。

我们希望使用本教材的学生不仅仅满足于读懂文章，而是循着理解——记忆——活用的学习规律，切实地提高听、说、写、读、译的五会能力，最终达到准确而熟练地表达思想的目的。为此，除了与低年级时一样，要重视课文的朗读和背诵之外，更需要养成自学和从事科研的习惯和能力，学会熟练地使用原文辞典和各种日文工具书。

在编写本教材过程中，利用和参考了日本几十家出版社所出的初、高中国语教材、教学资料和图书；同时也利用和参考了所能见到的国内出版的一些书刊杂志。教材的课文和课外读物部分都注明了出处，其他部分所引用的一些语言材料，由于引用的范围很广，涉及的文章、书刊甚多，並大多经过删节或改写，故不一一注明出处。

本教材由上海外国语学院日语系陈生保、胡国伟、陈华浩编写。陈生保担任主编，胡国伟任副主编。编写过程中，曾得到我校院系领导、各位同事以及外语教育出版社的大力支持，同时得到在我系任教的日本籍教师田村英敏先生的热情帮助，在此谨致谢忱。

这部教材的初稿始编于一九七八年秋，自一九七九年二月起在我院日语专业使用；也曾蒙复旦大学、华东

师范大学、上海大学、南京大学、杭州大学、四川外国语学院等兄弟院校的日语专业试用。在付印之前，编者根据我校使用的经验，也吸收了有关各方的意见，对原教材作了较大的修改。但由于编者水平有限，本教材的缺点和错误在所难免，敬请读者批评指正。

编　者

于一九八四年十二月

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目次

第一課　焼捨……1
注　釈
ことばの使い方
「うろ覚え」
「……に忍びない」
「何かと」「何かにつけて」
「これと言って……ない」
「大体」
「いっそのこと」
「知る」
手引と練習
課外読物　散文詩五編
注　釈
第二課　短歌の鑑賞……13
注　釈
ことばの使いい方
「微する」
「体当たり」
「さして…ない」
手引と練習
課外読物　短歌を味わう
注　釈
第三課　鵜……23
注　釈
ことばの使い方
「偶々」
「……くんだり」
「……はなし（……放し）」
「さながら」
「……とて」
「何でも」
「いやに」
手引と練習

課外読物　なくなった原稿
注　釈
第四課　かけす……37
注　釈
ことばの使い方
「……か……ないかくらい」
「と見こう見する（左見右見する）」
手引と練習
課外読物　植木屋
注　釈
第五課　龍舌蘭……47
注　釈
ことばの使い方
「かれこれ」
「手持無沙汰」
「泊まりがけ」
手引と練習
課外読物　出世
注　釈
第六課　画の悲しみ……63
注　釈
ことばの使い方
「癪」
「気が気でない」
「手に余る」
「胆を抜かれる」
「胸がすく」
「さりとて……ない」
手引と練習
課外読物　西班牙犬の家
注　釈
第七課　コラム五編……78
注　釈
ことばの使い方
「手につかない」
「変わりばえ」
「わり」
「……どころか」
「まんざら」

手引と練習
課外読物　坊ちゃん
注　釈
第八課　断腸亭日乗……94
注　釈
手引と練習
課外読物　限界状況における人間
注　釈
第九課　漢文の訓読……105
課外読物
注　釈
第十課　古典……111
春はあけぼの〔枕草子〕
注　釈
通　釈
祇園精舎〔平家物語〕
注　釈
通　釈
旅の心〔奥の細道〕
注　釈
通　釈
課外読物　古典文学の流れ
注　釈

第一課　姨捨

井上　靖

私が初めて姨捨山の棄老伝説を耳にしたのは一体何時頃のことであったろうか。私の郷里は伊豆半島の中央部の山村で、幼時私はそこで育ったが、半島西海岸の土肥地方にも、往時老人を山に棄てたという話が語り伝えられており、おそらくはその話と一緒になって、姨捨山の伝説は私の耳にはいり、私の小さい心を悲しみでふくらませたようである。

私はその時五つか六つくらいではなかったかと思う。その話を聞いて縁側へ出ると、私は聲を上げて泣き出した。その場所が何処であったか記憶していない。ただうろ覚えに覚えていることは、祖母だったか母だったか、とにかく家人が急に私が泣き出したことを訝っ、縁側へ飛び出して来て、何か二言三言言葉をかけてくれたことである。私には勿論物語そのものは理解できなかったが、母を背負って、その母を山へ棄てに行くという事柄の悲しみだけが抽象化されて、岩の間から滴り落ちる水滴のように、それが私の心に滲み入って来たのである。私は自分が、母と別れなければならぬという悲しみに耐えかねて泣き叫んだのである。

姨捨山の説話をはっきりと一つの筋を持った物語として受取ったのは、十か十一の時のことである。當時十里程離れている小都市に住んでいた叔母から、時々絵本を送って貰ったが、その一冊に「おばすて山」というのがあった。

姨捨山の棄老伝説というものは、少しずつ細部が変って何種類か流布されているらしいが、私が知っているそれは、全くこの絵本に依ったもので、それをなんら修正することなしに今日まで持ち続けている。絵本「おばすて山」が少年の私の心にいかに強烈な印象をもって捺印されたかが窺える。私が幼時聞いた物語の中で現在に到るもなお忘れないでいるものは、高野山に父を訪ねて行った石童丸の物語とこの姨捨山の物語である。共に親と子の哀別離苦をその主題としている。

後年大学時代、私は夏の休暇に郷里に帰省し、偶然土蔵の戸棚の中からこの絵本「おばすて山」を発見し、改めてこれに眼を通したことがある。最初の一頁の挿絵だけが着色され、他の頁にはそれぞれ凸版の挿絵がついていて、子供には幾らか難しすぎると思われる文体で、姨捨山の説話が書かれてあった。

昔信濃の国に老人嫌いな国主があって、国中に布告して、老人が七十歳になると尽くこれを山に棄てさせた。ある月明の夜、一人の百姓の若者が母を背負って山に登って行った。母が七十歳になったので棄てなければならなかったのである。

併し、若者はどうしても母親を棄てるに忍びず、再び家に連れ戻り、人眼につかないように床下に穴を掘って、そこにかくまった。この頃国主の許に隣国から使者が来て難題を持ちかけた。三つの問題を示し、これを解かなければ国を攻め亡ぼすというのである。その三つの問題というのは、灰で縄をなうこと、九曲の玉に糸を通すこと、自然に太鼓を鳴らすことというのである。国主は困って国中に触れを出してこの難題を解く智慧者を求めた。若者は床下にかくまっている母親にそれを話すと、母親は即座にそれを解く方法を教えてくれた。若者はすぐ国主のもとに申し出て、ために国の難を救うことができた。国主は若者の口から、それが老母の智慧であることを知り、老人の尊ぶべきを悟ってさっそく棄老の掟を廃するに到ったという。

——こう言った物語である。最初の着色してある頁には、烏帽子のような頭巾をかぶった若者が老いた母親を背負って深山を分け登って行くところが描かれてあった。母親は頭髪だけは白かったが、その顔はひどく若々しく、それが少し異様に感じられた。満月の光は木も草も土も辺り一面を青く染め、二人の人物の影はインキでも流したようにくっきりと黒く地上に捺されてあった。粗雑な低俗な絵ではあったが、併し、物語のその場面の持つ悲しみは、やはり、この場合も、絵柄の表面から吹き出していて、子供の心には充分刺戟的であろうと思われた。

私は実際には長いこと篠井線の姨捨駅も、その附近も知らなかった。この地方に旅行することはあったが、いつも、夜にぶつかることが多く、昼間の場合は気がつかないうちに姨捨駅を通過していて、姨捨山という土地には縁がないままに過ぎていた。

その後、姨捨の棄老伝説が私の頭によみがえって来る機縁を作ってくれたのは母であった。

母は何かの拍子にふと、

「姨捨山って月の名所だというから、老人はそこへ棄てられても、案外悦んでいたかも知れませんよ。今でも老人が捨てられるというお触れがあるなら、私は悦んで出掛けて行きますよ。一人で住めるだけでもいい。それに棄てられたと思えば、諦めもいいしね」

そう言ったことがある。母は七十歳だった。母の言葉はそれを聞く家人の耳には、一様に皮肉に響いた。その座には私の弟妹たちも居たが、みなばっとして衝かれたような表情を取った。戦後の何かと物の足らぬ時でもあり、家族制度への一般の考え方もヒステリックな変り方を見せている時で、老人夫婦と若い者たちの間に起る小悶着は、私の家庭でも決して例外ではなかったが、併し表だってこれと言って母親に家庭脱出を考えさせるような何の問題もあるわけではなかった。おそらく母は、自分が姨捨の説話の世界では、丁度山に棄てられる七十歳になっていることに気付き、生来の自尊心の強さと負けん気から、その説話にと言うより、それに何か似通って来ている戦後の時代の雰囲気というものに瞬間挑戦する気になったのではな

いかと思われた。

子供の絵本に描かれてあった老婆のように、母親は髪こそ白いが、艶々とした肌と皺一つない若々しい顔を持っていた。私は暫く言葉もなく、その母の顔を見守っていた。生来老人嫌いの母であったが、今や彼女自身年齢から言えばれっきとした老人であった。私は、自分の老齢を意識し、それに反抗しようとした、そんな母が哀れに思われた。

信濃の姨捨というところが、私に妙に気になり出したのはそれからのことである。

私はその頃から仕事の関係で旅行する機会が多くなり、信濃方面にも年に何回となく出掛けるようになったが、中央線を利用する時は、丘陵の中腹にある姨捨という小駅を通過する度に、そこから一望のもとに見降ろせる善光寺平や、その平原を蛇の腹のような冷たい光を見せながらその名の如く曲りくねって流れている千曲川を、他の場所の風景のように無心には眺めることができなかった。また信越線に依る時は、列車が逆に中央線から眺め渡した低い平原の一部を走るので、戸倉駅附近になると、窓越しに、僅かに屋根の赤さでその存在を示している姨捨駅を対かい合っている丘陵の斜面に探し出し、その附近一帯を、あの辺りが姨捨なのかといった一種の感懐をもって、眺め渡すのが常であった。

勿論、私は観月の場所としての姨捨には殆ど関心らしい関心は持っていなかった。信濃の清澄な空気を透して、千曲川、犀川を包含した、萬頃一碧の広野に照り渡る月の眺めはなるほど壮観ではあろうと思ったが、戦時中満洲の荒涼たる原野に照る月を眺めた私には、姨捨の月がそれに勝るものであろうとは思われなかった。

私が姨捨附近を通過する時、例外なく私を襲って来る感慨は、必ずその中に老いた母が坐っていた。ある時私は姨捨駅を通過する時、自分が母を背負い、その附近をさまよい歩いている情景を眼に浮かべた。

勿論時代は太古である。丘陵の中腹から裾に点在している現在の人家の茂りは見られず、荒涼たる原野が広がっている。しかも夜で月光が絵本「おばすて山」の挿話のように辺り一面に青く降り、私と母の影だけが黒い。

「一体、わたしをどこへ棄てようと言うの？」

と、母は言う。七十を過ぎて体全体が小さくなり、その体重は心細いほど軽いが、私はともかく一人の人間を背負って方々歩き廻った果なのでひどく疲れている。一足歩く度に足許がふらつく。

「ここらにしますか。この辺に小さい小屋を建てたら――？」私が言うと、

「厭、こんな場所！」

母の声は若い。体は弱っているが、気持は確りしていて、生れつきの妥協のなさは、自分が棄てられるこのような場合にも、いささかの衰えを見せていない。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

「崖の傍では、雨の時山崩れでもしたら危ないじゃありませんか！もっと気の利いたところはないものかしら」
「それがないんです。大体、お母さんの望みは贅沢ですよ。やはり、先刻見た寺の離れを借りることにしたらどうですか」
「おお、いや、厭！」
母は背中で、わが儘な子供のように手足をばたつかせる。
「あそこは夏には蔵蚊が多いと思うの。それに建物も古いし、部屋も暗くて陰気じゃありませんか。他人のことだと思って、不親切ね、貴方は」
私は途方に暮れてしまう。
「それなら、やはりいっそのこと家へ戻りましょう。こんなところに住むより、家へ帰って、みんなと一緒に賑やかに暮した方がどんなにいいか判らない」
「また、そんなことを言い出して！折角家を出て来た以上、わたしは、家へだけはどんなことがあっても帰りません。またみんなと一緒になるなんてまっぴらですよ。家の者も厭、村の者も厭、もうわたしは老先き短かいんだから、気のすむように一人で気随気儘に住まわせておくれ」
「わが儘ですよ、お母さんは！」
「わが儘ですとも。わが儘は生れつきだから仕方ありませんよ。それにしても、わたしの顔さえ見れば、貴方はわが儘だ、わが儘だと言う。棄てられるというのに何がわが儘です」
「困ったな！」
「いくら困ったって、わたしは家へなんか帰らないから。早く棄てておくれ」
「棄てたくても、適当な場所が見当らないじゃないですか」
「見当らないのは探し方が悪いからです。一人の母のために、棄てる場所ぐらい探してくれたって罰は当りますまい」
「先刻から足を棒にして探しているじゃありませんか。私がふらふらしていることは知っているでしょう。一体、どのくらい歩いたと思います。当ってみた家だけでも十軒はありますよ」
「でも、わたしにはどこも気に入らないんですもの。大体、住めそうな家が一軒でもありましたか」
「だから家を借りるのは諦めて、気に入る場所を探し、そこへ私が小屋を建ててあげようと言っているでしょう。それを、どこへ行っても文句ばかり言って」
「文句だって言いますよ、老人ですもの。——ああ、ほんとに何処か一人きりで静かに住める場所はないものかしら。もっと親身になって探しておくれよ。——ああ、腰が痛いわ。もっと軽くふんわりと背負っておくれ。おお、寒くなった。月の光がちくちくと肌を刺すような気がする」
「暴れないで静かにしていて下さいよ。私も疲れているんです。お母さんは背負われているからいいが、私の方は背負っているんですからね。お願いです。やはり、家へ帰ることにして下さい。みんなもどんなに安心するでしょう」

「厭！」
またしてもぴしゃりと母は言う。
「厭でも知りません。こんなところを一晩中うろついていられますか。本当に私は帰りますよ」
すると、母は急に打って変った弱々しい声を張り上げる。
「堪忍しておくれ。それだけは堪忍しておくれ。どうか家へだけは連れ戻さないでおくれ。もうなんにも言いません。どんなところでも結構です。棄てておくれ。わが儘は言いません。あそこに小屋が見える。あそこでもいい。あそこへ棄てておくれ」
「あの小屋は先刻見た時隙間風が冷たいとおっしゃったじゃありませんか。それに雨漏りもする！」
「どうせ気には入らないが、でも、仕方がない。もう辛抱します。一軒家だから、その点は静かにのんびりと住めるでしょう」
「だが、あそこはやはりひどいですよ。子供として母親をあそこには棄てられません」
「ひどくても構わない。さ、早く、あそこへ棄てて行っておくれ」
そう母は言う。こんどはそこに佇んでいる私の体に、月光が刺すように痛く滲み込んで来る。
——私の眼に浮かんで来たのは、こうした私と母との一幕である。私と私の背に負われている母との会話は自然にすらすらと私の脳裡に流れ出て来たものである。母はわが儘であるが、その表情には真剣なものがある。棄てておくれ、棄てておくれと言っている母のせがみ方には、ある実感がにじみ出ている。
私はわれに返ると、空想の中の母に、いかにも自然に母らしい性格がにじみ出ていることが可笑しかった。姨捨を舞台とした私の空想の一幕物は、例の棄老説話の持つ主題とはかなり遠く隔っていた。私の場合は母自らが棄てられることを望んでいるからである。棄てられたいと言い張って諾かないのである。私はそんな背の上の母を持て余して、姨捨の丘陵地帯をさまよい歩いているのであった。併し、その可笑しさとは別に、自分の心のどこかに氷の小さい固塊のようなものが置かれてあるのを私は感じた。可笑しさが消えると、それに替って、冷んやりした思いが次第に心の全面に拡がって来そうであった。
私は自分が棄てられたいとせがんでいる母を想像したことが厭であった。むしろ自分が母を棄てようとしている場面を想像する方が、まだしも気はらくであるかも知れなかった。
それにしても、私はどうしてそんな母を想像したのであろうか。私の長い間そのことを考えていた。そして私は私の背の上に、母に替って自分を置いてみた。私が老人になったら、今空想した母のように或いは自分はなるかも知れないと思った。
（新潮社「日本文学全集」井上靖集による）

注釈

一、筆者　井上　靖

一九〇七～一九九二年。小説家。北海道生まれ。郷里は静岡県伊豆湯ケ島。京都大学哲学科卒業。小説「闘牛」「猟銃」などにより作家としての地位を確立した。主な小説に「淀どの日記」「氷壁」「天平の甍」「楼蘭」「敦煌」「孔子」などがある。

二、姨捨

信州姨捨山の伝説。老後、周囲の者から見捨てられること。「姥捨」とも言う。

三、姨捨山

長野県善光寺平の南部にある山。海抜一二五二メートル。観月の名所。

四、高野山

和歌山県西北部にある山。海抜九八五メートル。幽寂の地で、八一六年僧空海が真言宗の総本山金剛峰寺を創建。

五、石童丸（石堂丸）

伝説中の人物。父は加藤左衛門繁氏で、僧名が苅萱。石童丸が出家した父を尋ねて高野山におもむいたが、偶然わが子石童丸に出逢った苅萱は、父は没したと偽ってわが子を帰す。

石童丸が帰った時、母はもう宿で没していたという悲しい話。

六、信濃

来国名。いまの長野県。信州とも言う。

七、烏帽子

（黒塗りによる烏色の帽子の意）かぶりものの一種。奈良時代以来、結髪の一般化につれて広く庶民の間にも用いられた。貴族の間では私邸内の平常の料とし、階級、年齢などによって、形と塗り様とを異にした。また、もと黒色の紗絹で作ったが、後世は紙で作り、漆で塗り固めた。立烏帽子・風折烏帽子・侍烏帽子・引立烏帽子・揉烏帽子などがある。

八、篠井線

長野県内にある鉄道線。

九、姨捨駅

長野県長野市西南にある。

十、中央線

中央本線のこと。東京駅から甲府・塩尻中津川を経て名古屋駅に至る国鉄線。延長四一二・九・キロ・メートル。中央日本の山間部を横断する重要な幹線。

十一、善光寺平

長野盆地の別名。

十二、千曲川

長野県北部を流れる川。甲武信岳に源を発し、上田盆地から善光寺平に入り、長野市付近、川中島で犀川と合流、なお北上して新潟県に入り信濃川となる。長さ一三六キロ・メートル。

十三、戸倉駅

長野県埴科郡戸倉町にある。

十四、犀川

長野県、信濃川上流の梓川と奈良井川の合流から北東へ流れ、川中島付近で千曲川と合流する川。長さ八十キロ・メートル。

十五、満州

日本軍国主義者が、一九三一年九月十八日に、わが国の東北地方を侵略して作り上げた傀儡政権、満州国のこと。作者は、一九三七年頃、そこにいた。

ことばの使い方

一、「うろ覚え」

物事をはっきりとでなく、ぼんやりと覚えていること。不完全に記憶していること。「うろ覚えで」「うろ覚えに」は連用修飾に、「うろ覚えの」は連体修飾に使われる。

○ 不思議なことに、そのとき、うろ覚えのハイネの詩の切れっぱしが私の口をふと衝いて出た。

○ 何か話して、と子供にせがまれた私は困ってしまい、やはり私が子供のとき母に聞いた童話をうろ覚えで語り始めた。

二、「……に忍びない」

「忍びない」は形容詞的なので、「動詞の連体形＋に」について使うのが普通である。「……に忍びない」は、「……するのを我慢できない」という意味を表す。

○ せっかく相談に来た顔なじみの婦人を素手で追い返すには忍びないことだ。

○ その傷だらけの、今にも息をひきとろうとしている彼の姿を見逃すに忍びず、人々は急いで救急車を呼んだ。

三、「何かと」「何かにつけて」

「何かと」は副詞的に使って、「いろいろと」「あれやこれや」の意を表す。そして「何かに付け（て）」は「あの点でもこの

点でも」という意に使う。

○ 途中彼は何かと冗談を言ってみんなを笑わせたりして、少しでも旅の疲れを忘れさせるようにした。

○ どういうわけか、彼は頭がこちこちで、何かにつけ反対するのである。

四、「これと言って……ない」

「これと言って」は慣用語で、「特にとりたてて言う」という意味を表すが、下に打ち消しの語句を伴なう。「これと言って…ない」は「特にとりたてて言うほど……ない」の意に使われる。

○ あの人は、これと言って大きな欠点もないのだが、またこれと言ってとりえもないのだ。

○ 工事が始まってもう三か月もすぎたのですが、資材の質が問題になっているので、これと言って人々を喜ばす進展が見られません。

五、「大体」

(1) 名詞と副詞として使われる。ある事物や人のほとんど全部を示す。

○ ご意見の大体うかがっておりますが、なおこまかい点についてご説明をねがいます。

○ あなたの言おうとしていることは大体わかりました。

(2) 副詞として使われる。「そもそも」「総じて」「大きく言って」などの意を表す。

○ そんな話を信用しないでください。だいたいそんなことのあるはずがないよ。

○ これがあの人の仕業とは思わなかった。あの人はだいたい何を考えているのかさっぱりわからない。

六、「いっそのこと」

慣用語。副詞的に使う。このままの状態をたもつよりも、ふつうでは取らない手段を思い切ってとろうとする意を表す。「いっそ」とも言う。

○ どうせいつかはわかるんだから、いっそ（のこと）今のうちに話してしまったほうがいい。

○ こんな思いをして生きているくらいなら、いっそ（のこと）川へでも身を投げて、死んでしまったほうがましかも知れない。

七、「知る」

動詞「知る」は、「わかる」「理解する」「記憶する」「人と交際する」「気づく」などの意味を持つほかに、「関心を持つ」という意にも使われる。

○ そんなことは僕の知ったことではない。

○ 「知らぬ顔の半兵衛」というのは、知っていながら知らないふりをして澄ましているさまのたとえに使われることわざである。

手引と練習

一、「私」が子供のころ初めて棄老伝説を聞いたとき、どうでしたか。そのときの様子を話してください。そして、それはなぜだったでしょうか。

二、石童丸の物語を、日本の民話集などを調べて自分の言葉で語ってみてください。

三、「姨捨山」の話の荒筋を紹介してください。

四、「姨捨山」という話に出ている三つの難題はどう解いたらいいか、資料を調べてはっきりさせましょう。

五、「……今でも老人が捨てられるというお触れがあるなら、私は悦んで出掛けて行きますよ。一人で住めるだけでもいい。それに棄てられたと思えば、諦めもいいしね」とありますが、「母」はどんな気持でこういいましたか。そして、「それを聞く家人の耳には一様に皮肉に響いた」のはなぜでしょうか。

六、観月の名所としての姨捨山に「私」がほとんど関心らしい関心を持っていなかったのはなぜでしょうか。

七、「私」が空想した、母親を棄てる一幕物のあらすじを要領よく話してください。

八、「私」が空想した、母親を棄てる一幕物と、例の棄老伝説とはどう違いますか。

九、本文後半の空想の話から、「私」と「母」はそれぞれどんな性格の人物か、簡潔に答えてください。

十、文章の終りに「……私は私の背の上に、母に替って自分を置いてみた。私が老人になったら、今空想した母のように或いは自分はなるかも知れないと思った。」とありますが、これは「私」のどんな気持を表していますか。

十一、本文中の次の三つの長い文の構造を分析してから、中国語に訳してみましょう。

① おそらく母は、自分が姨捨の説話の世界では……というものに瞬間挑戦する気になったのではないかと思われた。

② 私はその頃から仕事の関係で旅行する機会が多くなり……千曲川を、他の場所の風景のように無心には眺めることができなかった。

③ また信越線に依る時は、列車が逆に……一種の感懐をもって、眺め渡すのが常であった。

十二、老人問題——その昔の様子と現状、また私たちの然るべき態度などをめぐって座談会を開きましょう。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com